

自己の効果的・肯定的変化を促すインテリアデザイン手法の構築

Method Development of Interior Design to Encourage Occupants
to Make Effective and Positive Changes

松田 奈緒子 (MATSUDA Naoko)

本研究は、住み手が行う「空間の自己化」を手掛かりとして、インテリア空間のデザインをサポートする手法の構築を目指す。

人は何もない空間に対し、そこに住み始めたときから、自分の生活や感性に相応しい個別の空間に仕立て上げていく。この「空間の自己化」の過程でインテリア空間には自己が投影される。逆に、自己化されたインテリア空間に自己は影響されることもわかっている（松田・加藤 2014）。したがって、インテリア空間をある意思・意図をもってデザインすることにより、自己の効果的・肯定的変化を促すことが可能と考える。

本研究では、約 15～20 年を経ることで起きた自己とインテリア空間の変化を、追跡調査によって明らかにすることを目的とする。この研究を遂行するには、約 15～20 年前の協力者の現在の所在の確認、調査への協力依頼と承諾に慎重を期す必要がある。そのため、本年度は、①調査対象者の選定や調査準備を整え、②インテリア学・デザイン学に加え臨床等も含め文献調査を行った。

①について、調査対象者への連絡が困難と思われた、約 15 年前に調査を実施した精神に病みを持つ若者と今でもコネクションを持つ NPO 団体代表者にコンタクトをとることができ、彼らに今後の調査への再協力を依頼できる環境を整えた。

②について、ひきこもり当事者に撮影してもらった部屋（2008、2009 年当時）の写真集、渡辺篤『アィム ヒア プロジェクト』を対象に文献調査を行った。38 人が撮影した計 159 枚に映っているものを 31 項目に類型化し、①床が見えない部屋、②片付いた寝具やデスク、③他者との接点、④止まった時間・空間、等の特色を導き出した。

これらとは別に、ひきこもり支援団体が主催するワークショップに参加し、ひきこもり当事者やその家族の生の声として、ひきこもっていた当時の部屋と現在の部屋との違いなど貴重な情報を収集した。

さらに、社会背景として、わが国におけるインテリア空間が時代と共にどのように変化してきたのかを探るため、1964 年の創刊から 50 年以上に渡り発刊し続けているインテリア雑誌『DREAM』の文献調査、並びに、編集長へのインタビュー調査を行った。その結果、時代ごとに、①表紙デザインの構成の大きな変化、②撮影されているインテリア要素、③色彩の変化について、その特色を読み取ることができた。

また、従来から継続している LGBT 当事者の自己とインテリア空間との関係性を調査した成果の一部を日本インテリア学会にて発表した（「TV ドラマにおける LGBT 当事者のインテリア空間の描かれ方」、第 33 回大会研究発表梗概集、pp.1-2、2021 年 10 月）。